

昆虫4億年

永田和宏 JT生命誌研究館 館長



JT生命誌研究館では毎年テーマを設け、企画展示を開催しています。昨年は、チョウの幼虫の食草を植えた屋上庭園を舞台にした「食草園が誘う昆虫と植物のかけひきの妙」とし、同名の映画も上映しています。今年は、4部作で「生きものの時間」を展開します。第1期が「生まれるまでの時間」、第2期が「生まれてからの時間」。そして来年は、進化まで含めて時間について考えます。



写真：大西成明

生きものと時間は切っても切り離せないものです。私たちにも寿命があり、成長する時間があります。大事なことで、意外と生命科学の分野で、正面から時間を取り上げることは多くありません。私たちの企画展にご期待いただければと思いますが、今回も「昆虫4億年」と題して、写真家の今森光彦さんにご講演いただき、同時に、昆虫写真展「今森光彦の時間」を開催します。昆虫の驚きに満ちた生きる術、他者との関わり合い、そして多様で美しい姿のもつ意味に思いを巡らせ、生命38億年の歴史について、考える契機としていただければ幸いです。

そして「里山」という言葉が日本でこれほど認知されたのは、今森さんが提唱された功績が非常に大きいと考えています。対談では、昆虫・人間・さまざまな生きものが生活する場所、時にせめぎ合いの中で生きていく場所としての里山の重要性を考えたいと思います。

世界の昆虫スペクタクル

今森光彦 写真家



CHAPTER

1. 決死の覚悟と祈りで撮影に挑む
2. ラフレシア — 熱帯雨林の生態系が生かす世界最大の花
3. メダマカレハカマキリ — 目玉模様を見せる演出
4. ハンマーオーキッド — メスのハチに見事に化けた花
5. サバクワタリバッタ — バッタではないものを見たような恐怖



1. 決死の覚悟と祈りで撮影に挑む

学生の頃から、死ぬまでに昆虫のスペクタクルを自分の目でできるだけ見たいと思っていました。それ以来、世界の昆虫と日本の里山環境を、並行して追いかけてきました。ですので、どこに行ったのかよく分からないんです(笑)。

2009年東京都写真美術館で「昆虫4億年の旅」という写真展を行いました。その際、担当の学芸員が、私のフィールドノートをマルサの女のような感じで洗いざらい見てくださいました。そのおかげで、無くしたと思った写真も見つかり、仕事をまとめることができました。訪れた国数が48カ国と聞いた時は、少なくてショックでしたが、よく見ると同じところへ何遍も渡航していました。一番長かったのはアフリカで、4カ月間の滞在を8年間続けていました。アマゾン6回、ブラジルエリアも6回、インドネシアは58回ほど行っていました。ヨーロッパとアメリカはほとんどありません。国数が少ないわけですね。



講演会場写真：大西成明

20代後半から40代までは頻繁に海外に渡り、半年以上日本にいませんでした。ブラジルから日本に帰国した3日後にマダガスカルに行く暮らしです。ひどいもんですね。その間はずっと、マラリアと肝炎の予防接種をしていました。ファンシダールというマラリアに優れた薬ができた時は、1週間に1度の服用で済みましたが、薬効がきつく、2～3年でドクターストップがかかりました。医者が「まだ生きていますか」と言うので「生きてい」と言うのと「薬はやめなさい」と言うんです。実は、写真を撮ることよりも、その裏側が大変でした。

決死の覚悟で準備を整えたら、飛行機の中はほとんど祈りの時間です。頭の中は撮影のプロセスでいっぱい、どうしたら撮れるか、どうしなかったら撮れないか、ばかり考えて過ごしたのを覚えています。インドネシアでは旅をする毎に7キロ痩せて帰りました。「今森さんは絶対肝炎に罹っているから、抗体があるでしょう」と言われますが、検査では陰性と出ます。運がちょっと良かったのかもしれませんが。本当によく今までやってきたなという気がします。

今日の講演では世界の昆虫について、写真集に掲載していないことも交えて、4つお話しします。



2. ラフレシア—熱帯雨林の生態系が生かす世界最大の花

最初は世界最大の花、ラフレシアにしましょう。アジア圏に十数種類ありますが、スマトラ島の中北部に分布するものが最大で、直径が1メートル近くあります。林床の落ち葉の上にこんなふうにはパカッと咲いて、たった3日間で枯れてしまいます。私が最初に訪れた20数年前は、ラフレシアの生態は謎だらけ。腐肉の匂いがして、ハエによって受粉するくらいの限られた情報しかありませんでした。

至近距離で、かつ花の内部も撮影したかったので、まず保護区の外でラフレシアが自生する場所の調査が大変でした。事前に3回ほどインドネシアに渡り、現地のWWF(世界自然保護基金)担当者と親しくなって、ラフレシア・アーノルディー(学名: *Rafflesia arnoldii* R.Br.)が咲く所に案内してもらいました。当然ですが、まず見つかりません。1カ月ほど経った頃に運よく大型のキャベツほどの蕾が数個見つかりました。いつ咲くか聞くと「明日かもしれないし、3カ月後かもしれない」と平気で言うんです。待つには長いので日本に戻ったら、現地から「咲くかもしれない」と電話がありました。私は、その4日後にインドネシアにいました。しかし、蕾は前と変わらない。今でも思い出すほどショックな光景でした。現地の人たちは、どうも私に会いたいから呼んだようなのです(笑)。

その後しばらく経って行った時に、別の蕾を見つけ、今度は居着くことに決めました。3カ月を最大にしてジャングルに住もうと思ったんです。6畳ほどの2階建バンブーハウスをラフレシアの蕾の上に建て、2階に隙間を作って上から覗けるようにしました。雨に濡れないようにカメラをセットし、齧歯類のネズミがラフレシアを踏み荒らさないように囲いました。WWFの担当者と、屋台の料理人にも住んでもらいました。さらに、ライフルを持った地元猟師も雇いました。見た時には殺されているというスマトラトラの生息地だったからです。過去に、日本やイギリスの番組がラフレシアの撮影に挑んだ際の敗因を調べ、対策し、さまざまな情報を集めて入念に準備しました。撮影が成功したら世界で初めてです。



写真提供：今森光彦

花が咲いて黒く腐るまでの全プロセスを撮ること、花の断面を割って受粉のメカニズムを探ることに頭を巡らせながら、来る日も来る日も過ごしました。忘れもしない、2カ月少し過ぎた頃に、蕾の一番外の皮が1センチほどフツと持ち上がりました。あの時の身の震えと緊張は言葉になりません。感動しました。それからは5分おきに確認です。夜間は5分おきに起き続けると死んでしまうので、3人位が代わる代わる隙間から懐中電灯で照らして覗き見ました。そうして3日目、ついに1センチほど浮いた皮がフワッと広がり1時間ほどであっという間に咲きました。手に汗握り、数分毎にシャッターを切り、黒く腐るところも撮りました。この動画のような写真は『世界昆虫記』(福音館書店1994)に見開きで掲載しています。

ラフレシアは腐肉の匂いと言われていましたが、実際はツンと鼻に付く外便所の匂いで、神様に捧げるサカキの小さな花の匂いと同じでした。花の断面からハエの動きを観察すると、不思議なことに、ラフレシアはオビキンバエというただ1種類のハエだけを呼びます。始めハエは匂いのもとを探し求めて飛び回り、花の裏側に行き着くとトコトコ歩いて奥に移動しました。しかしそこに餌はなく、代わりにこってりしたクリーム状の雄しべがあります。頭に花粉を擦り付けたハエは、Uターンして外

に出て行きますが、多くの場合はまた同じ花に飛び込んで、同じことを繰り返します。

花が全開すると、内部は花粉の付いたハエだらけになっています。その3日後にラフレシアが黒くなり、無臭でぺちゃんこに腐ると、ハエが一斉に飛び出します。それが遠征して離れたラフレシアが受粉するのです。3日という時間は、恐らくハエの寿命です。ハエが死なないうちにラフレシアが枯れて匂いが無くなれば、ハエも関心を失い、外に飛んで行かせられます。



作品① ラフレシアの内部（インドネシア 1989年）

ラフレシアの屍には、ゴマのような種が無数にあり、ネズミなどの齧歯類が食べて動き回り、糞をします。糞に入った種は、熱帯に生息するヒレブドウの根に落ちた時にだけ発芽できます。ラフレシアは、ヒレブドウの寄生植物だったんです。受粉をハエに、種の移動をネズミに、発芽をヒレブドウに託しているわけです。ラフレシアを人工的に咲かせようとすると、熱帯雨林の生態系が必要です。イギリスやスイスで試みているものの、まだ成功はしていないようです。

3. メダマカレハカマキリ一目玉模様を見せる演出

マレーシアに生息するメダマカレハカマキリは、表から見ると枯れ葉模様で、質感と形が枯れ葉以上に枯れ葉に似ています。動かない限り、絶対と言っていいほど見分けが付きません。擬態、カモフラージュの典型です。

捕まえようと手を出したら驚いて、こんなポーズを取りました。開いた翅の模様が数字の9に見えますね。2つあるので眼状紋です。しかし、このポーズを見せることは稀で、多くの場合は、翅をそのまま上に片方だけ開きます。これは、私がちょうどカマキリの正面にいて、たまたまエネルギーのある若い個体だったという状況が見せてくれたと思います。

9の模様は、ちょうど動物の目ほどの大きさで、猛禽類の目によく似ています。これを見せられたら鳥やトカゲは怖い。しかし、眼状紋の本当のすごさ

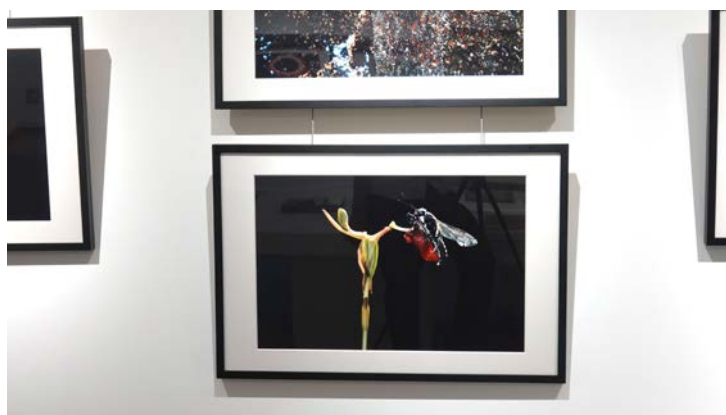


作品② メダマカレハカマキリ（マレーシア 1992年）

は、これを見せる演出です。まず、カマキリは柔軟に向きを変えて、きちんと相手の正面を向きます。そして見せる時間が素晴らしい。ずっとこのポーズを取っていたら、本物の目ではないと見破られるかもしれません。しばらくしたらパツと閉じるので、枯れ葉に混じり識別できなくなります。あれあれ？と知っているうちに、またグラツと現れ出てくる。見事です。見せたり隠したりする間隔は虫によって違いますが、どれも相手が怖がる時間をよく知っているのと、惚れ惚れします。標本や図鑑の眼状紋の解説には、こうしたテクニックはほとんど書かれていません。生きている姿に触れないと分からないことです。

4. ハンマーオーキッドメスのハチに見事に化けた花

オーストラリアに棲むオスのツチバチがハンマーオーキッドの花に抱きつく瞬間の写真です。赤い花芯をメスと間違えたんです。花からはメスに似たフェロモンが出ているので、視覚が関わらない遠くからでもオスバチが飛んで集まってきます。匂いを頼りに近づくと、姿も似ているので見事に引っかけられます。



作品③ ツチバチのメスに擬態するハンマーオーキッド
(オーストラリア 1991年)

メスには翅が無く飛べないので、オスがメスを抱えて葉の上に持って行き、交尾をする習性があります。このオスは、今まさにそれをしようとしているところ。花芯の付け根は蝶番になっていて、オスが花芯を抱えたまま飛び上がると、その勢いでパカンと真っ逆さまに倒れます。倒れた所にある花粉が、オスの背中にポコッと付くしくみです。花の柄には、なんとオスの体を受け止める受皿まであります。ラフレシアに集まるハエも背中に花粉を付けますが、虫は背中には脚が届かないので、植物にとって都合がいいんです。

オスはこの動作を何度も繰り返します。長ければ数分続くほどです。やがてメスではないと気づくと、花芯を放して飛んで行き、また別の花で行くと受粉が成立します。これを見るのは結構楽しいのですが、同じオスとしてちょっと情けなく、でも応援したくなる感じです(笑)。

5. サバクワタリバッターバッタではないものを見たような恐怖

日本のトノサマバッタより一回り大きいサバクワタリバッタの群れです。セネガルの国境付近のモーリタニアで撮影しました。去年もニュースになりましたが、アフリカで大発生したサバクワタリバッタが農作物を食べ荒らし、飢餓が起こります。この時は、誰も予想できない60年に1度の大発生でした。異常気象でサハラに雨が降り、急激に草が生えて餌が増えたのでしょう。

私は、日本でそのニュースを見た2週間後にモーリタニアにいました。バツタで空がほぼ真っ暗で、群れは2キロほどありました。群れの中はほとんどバツタでしたが、1匹も私の体に止まらず、避けて行きます。それがまず怖かった。さらに怖いのは、音がしないことです。さぞうるさかったでしょうと言われますが、無音でした。風に綺麗に乗って、バタバタ羽ばたきません。トノサマバツタが飛ぶイメージと全く違い、チョウよりも滑らかな美しい飛び方でした。ですから、何千キロも飛べるんですね。バツタではないものを見たようで、思い出すと鳥肌が立ちます。現地に立たないとわからない感覚です。



作品④ サバクワタリバツタの群れ (セネガル 1988年)

限られた時間で4作品しかお話しできませんでしたが、他の写真展でぜひご覧ください。『世界昆虫記』を出版した後も、オーストラリアのアボリジニが食べる、ミツツボアリという蜜を食べるアリを取材しましたし、他にも行きたいところ、見たいものがあります。これから順に取り組んで、またぜひ皆さんに見ていただける機会を持ちたいと思います。



基調講演のダイジェストはこちら



今森光彦 (いまもり みつひこ)

1954年滋賀県生まれ。写真家。大学卒業後独学で写真技術を学び1980年よりフリーランスとなる。以後、琵琶湖をとりまく全ての自然と人との関わりをテーマに撮影する。一方、熱帯雨林から砂漠まで、広く世界の辺境地の訪問を重ね、取材を続けている。また、ハサミで自然の造形を鮮やかに切りとるペーパーカットアーティストとしても知られる。近著に『小さな里山をつくる チョウたちの庭』『クヌギがいる』『今森光彦写真集 オーレリアンの庭』他多数。

SYMPOSIUM

対談

身近な自然・里山ーヒトと昆虫の営みの場



今森光彦

写真家



永田和宏

JT生命誌研究館 館長

CHAPTER

1. 生きものの関わりの妙

2. 生きている姿を見ないと分からない

3. 日本の里山から生まれた精神性

4. 農家のまなざし

5. 写真家と農家を行き来する扉の鍵



写真：大西成明

1. 生きものの関わりの妙

永田

非常に面白い講演をありがとうございました。ラフレシアの話では、ハエ、ネズミ、ヒレブドウが関わる複雑なプロセスを教えてくださいました。繁殖の効率から見ると、シンプルであればあるほど良いように思いますが、なぜラフレシアはこの3つを経ないと生育しない戦略をとるのでしょうか？

今森

ラフレシアの種は1つに数十万個でき、ネズミがいろいろな所にまき散らして、たまたまヒレブドウの上に落ちた時にだけ発芽します。ラフレシアにとっては、細い橋を渡るよう

な危険な行為ですが、ネズミにとっては餌をたくさん食べることになります。他者を生かす行為の中に豊かさがありますね。

永田 ものすごい量の種が全て発芽すると、生態系のバランスが崩れるのかもしれませんが。ラフレシアが3日で枯れるのも非常に素晴らしいタイミングです。枯れたものが最後に残ることは、今年の研究館のテーマ「生きものの時間」と重なります。時間が刻んだ進化の妙ですね。ヒレブドウにとって、ラフレシアを発芽させるメリットは何でしょうか？

今森 まだ分かっていません。ヒレブドウが無ければこの生態系が成り立たないことは確かなので、何かしらメリットはあるはずですよ。

永田 共生は、どちらも利益を得るのが基本的な考え方ですが、この場合のハエはただ働きですね。先ほど、オスが情けないと言われたツチバチもただ働きですか？

今森 ハンマーオーキッドは、ハチの繁殖シーズンが過ぎて、メスがいなくなってもあの機能を残します。受粉が済んだにも関わらず、あぶれたオスのために、遊ばせてあげているようです(笑)。オスも交尾相手がいなくなると飛ぶ意欲がなくなるはずですが、それを分かって楽しんでいるように見えます。

永田 受粉した植物は枯れてもいいはずなのに不思議です。人類は遊びを覚えた唯一の生物と言われますが、ハチも遊びを楽しんでいるのでしょうか。

2. 生きている姿を見ないと分からない

永田 メダマカレハカマキリの目玉模様で脅かす対象は、鳥とトカゲですね。驚かすには、目が一番いいんでしょうか？



今森 鳥もトカゲも視覚生物で、よくものを見て獲物を捕らえる習性があります。こういう生きものは、おそらくまず目を見るんじゃないでしょうか。目というより顔で、顔には危険な口がありますから、顔の認知に目を使っていると思います。

永田 わが家は山に直結しているので、猿が時々出ます。普段は手を叩くと逃げますが、一度だけ手を叩く前に猿と目が合ったことがあります。その時、手を叩いたら一直線に

私に向かってきました。大急ぎで走って逃げたんですが、ベランダの戸が開いていなかったら引っかけたと思います。逆に、熊に出会したら目を見てゆっくり下がれと言われます。目というものは不思議です。

今森

目は、あるところまで小さくなると逆に食べたくなるそうです。目の大きさには、逃げるか食べるかの境目がある。目の位置も重要です。目玉模様が、命に関わる大事なところにあると危険です。先ほど見ていただいたカマキリの翅は突端にありますので、もし食べられても逃げられます。本当に上手い所に模様があるので感心します。

永田

進化は人間が辻褄を合わせて理解するものなので、答えはないと思いますが、昆虫の演出の話も面白いですね。目玉模様はずっと見せずにパッと隠す。見せられた驚きと無くなった驚きの両方があるって、威嚇になるんでしょうね。

今森

擬態の本に、カマを上げて花に擬態したマノハナカマキリは、花と間違えて来た虫を捕獲する、と書かれていました。しかし、私が東アフリカで出会ったカマキリは、花に化けていなかったんです。これには驚きました。絹を裂いたような音がバリバリツとして、パッとポーズを取るのですが、その時見えるのは不可解な模様であって、花ではなかった。これは威嚇でした。本の解説者は、現物を見ずに標本で想像したのでしょう。



それから、葉にそっくりなコノハムシの生きた姿を見て驚くのは、その透明感です。コノハムシは自然界で必ず葉にぶら下がっているの、透かして見ると、葉そのものに見えます。捕食者の鳥は透過光で見ますので、見事なカモフラージュです。こういう本質は図鑑からはわからないことですね。

永田

写真は見せたいアングルで撮られますが、そればかり見ているとずっとそういう格好なんだと勘違いしてしまいます。面白くないところも含めて撮らないと、真の理解は得られない。写真家としてそのジレンマはありますか？

今森

そうですね。動画を撮りたくなります。写真機の機能が充実しましたので、これからは動画でも撮ろうと思います。擬態やカモフラージュは、何かに似せて隠れる行為を超えて、それそのものが本当に美しいです。

永田

その美意識が、昆虫に魅せられた人たちの一番深いところにあるのでしょうか。自然の中に自らを溶け込ませる擬態がある一方で、チョウなどは鮮やかな色でわざと目立たせる場合もありますね。これは、敵に対するカモフラージュと、異性に対するアピールなどの場合があると思います。

今森

チョウは、ある約束のもとにできた模様を持っていて、進化の系統も説明できます。表はメスにアピールする模様、裏は敵から隠れる模様と、役割がはっきりしています。だからこそチョウは綺麗ですが、ガの模様にはこうした秩序がありません。オスメスでコミュニケーションを取るのもフェロモンです。枯れ葉に似せた模様で、昼間鳥に見つからないようにするのは分かりますが、なぜこれほど綺麗な模様を持つのか不思議です。ガの翅には、外から絶対に見られない模様もあるんです。着物の裏地と同じような、特定の目的から解放されたおおらかさがあります。

永田

チョウは日中の可視光で見る模様ですね。ところがガの場合は、より低波長の紫外線領域でものを見ますし、超音波でコミュニケーションしています。メスを引き寄せる超音波、捕食者のコウモリに食べられないための超音波もあると聞きました。私たちが想像するよりはるかに豊かな想像力のもとに自然が動いていることを実感します。

3. 日本の里山から生まれた精神性



永田

奥本大三郎さんも今森さんと同じく、日本人ほど昆虫が好きな民族はないと、よくおっしゃいます。『ファール昆虫記』が一番好きなのは日本人だと。日本人はなぜ虫好きだと思いますか？

今森

日本人が持つ八百万の神の自然観、アニミズムと関係していると思います。そのためか、日本の子どもは、小さい頃から生きものに入魂するセンスがあるように感じます。例えば、雑木林でカブトムシを捕ったら、持ち帰って戦わせて遊びますが、カブトムシに自分の精神を託して「勝て!勝て!」と言うのは、アニミズムだと思うんです。タイで男の子がカブトムシを喧嘩させていた時は、バースを賭けていました。他国で、日本の子どものように等身大に遊ぶことは、おそらく無いんじゃないでしょうか。

永田

ヨーロッパなどは一神教なので、自然の中に神を見ることはまずありません。日本のアニミズムは非常に魅力的な考え方で、全てのものに神がいる。水の神もあれば森の神もある。虫にもある。これはとても面白い説ですが、子どもたちはその影響を受けているんじゃないでしょうか。

今森

近代農業ではなく、昔の農の形がアニミズムを生むと考えています。集落があり、社があり、奥の山があり、何か超自然的なものがある。私も経験しましたが、小さな頃から畏れのようなものを教わっている。今と違い、神社の向こうは怖かった。奥の森には行くなと言われていた。そういう時、どんなものが出てくるのかとものすごい想像します。昆虫もこれと共通して、友達であると同時に得体の知れない何かが生きた存在でもある。日本の子どもたちは、そういうものを見ているんじゃないでしょうか。

里山は、人と自然と一緒に暮らす空間です。同様の空間は西洋にもあると言われますが、日本との違いはアニミズムの精神性です。さらに、野仏に出会ったら拝むという行為。田んぼは持ち主がありますが、野仏の周囲数メートルは共有空間で、みながそこで拝みます。この行為は西洋にはありません。

永田

実は私、2020年から2年かけて、旧東海道を京都の三条大橋から東京の日本橋まで、二十数日かけて歩きました。驚いたのは、どこへ行っても必ずお社があることです。こんな小さな村にあるのかと思って見るとも2つも3つもある。神社やお寺が民衆の中に根付いているのが、日本人のアニミズムにつながる土台かもしれませんね。小さい時からお社で遊んで、お社の向こうに行っちゃいけないと言われてっていると、自然は単に飼いやらすものではなく、畏れの対象になるのかもしれません。

今森

日本の自然観は宇宙の中にいる行為だと思うんです。宇宙の中では、私たちは虫やカエルと同じなので、親近感を持って入魂できます。一方で、外から見るのが科学という気がします。科学の視点を持つと思ったら、宇宙の外に出なければなりません。自然に密

着すればするほど客観的に見えないことがあるので、日本の環境の話では、科学的な見方が欠落しがちとすることがあります。

4. 農家のまなざし

永田

今森さんは30年ほど前に滋賀県の大津市仰木町に千坪ほどの土地を買われ、ご自身で里山にされました。そして、里山に対する認識を日本に広められた功績が非常に大きい。さらに7年前には、農家になって田んぼを始められた。写真家の目で世界と日本を見てきて、里山はある種の理想をもとに作られたと思います。今度の田んぼは、どうでしたか？

今森

農家という職業にならないと田んぼが買えなかったので、7年前に農家になりました。田んぼは、農家から半分、自然から半분을学ぶ感じです。これまではカエルに出会ったら、アマガエルか？トノサマガエルか？と見ます。ところがそんな気持ちがなくなって「お前も生きてたか。今年も頑張ろうな。」になるんです。本当の農家の人の気持ちを思い知りました。これまではカエルの名前が大事だったのに、今はカエルが活着ていることが大事なんです。そのことがようやくこの歳になって分かってきました。

永田

名前や情報、知識からものを見るのではなく、先ほどおっしゃられた体感やアニミズム的なアフィニティからものに接する感じでしょうか？

今森

そうですね。都市から来た生きもの好きの人が「このおじいちゃんはこれだけ長い間田んぼを耕しているのに、これがトノサマガエルかアマガエルかも分からんのか。」と言ったりします。これは間違いで、農家の方が本質をよく知っています。それを今の子どもたちに伝えたい。里山という場所でリアルなものを見て触れてほしいと思います。現代は、バーチャルの世界になりつつありますが、バーチャルが進めば進むほどリアルが大事になってくると思います。

永田

私の生まれは、今森さんのフィールドに割と近い滋賀県の高島郡饗庭村で、小さい時に見ていたのはやはり、人間が自然とせめぎ合いながら作る里山の姿です。私も若い世代、子どもたちにぜひ体験してほしいと思います。



5. 写真家と農家を行き来する扉の鍵

今森

恐ろしいことに、農家でいると写真が撮れなくなる、撮る気が無くなります。撮影は客観視する行為なので、実は入ってはいけない領域なんです。写真家でいながら農家でいるには、「扉の鍵」を持つことです。里山という宇宙の扉を開けて中に入った後に、すぐに出て鍵を閉める行為が頻繁に必要です。この鍵をしっかりと持たない限り、おそらく私は写真家ではなくなります。よく生きてさえいれば、写真家でも、農家でも、どちらでもなくてもいいんですけどね(笑)。

永田

私たち科学者は、自然を分節化して言葉や数式で理解します。そのように世界を分けるのは、科学者や写真家の宿命です。一方で、自然の中で農業をしている人の視線は分節化ではない。自分の体験や世界観をまるごと受け入れるのでしょうか？

今森

人が生態系の中に入っているということです。そこに里山の農業と近代農業の違いもあります。これからの日本の自然を考えていこうと思ったら、科学者も扉の鍵を持つ必要があるかもしれません。一時的でも、扉を開けて宇宙の中に入って、景色を眺めるまなざしを持ってほしいと思います。

永田

今森さんの写真が7年前からどう変わってきたのか、今後10年20年でどう変わっていくのか、非常に面白いと思います。扉の鍵の開け閉めと行き来は、人の感性に必ず影響を及ぼすので、写真の移り変わりが楽しみです。

今森

そう言われると、ちょっと自信がないですけど(笑)。

永田

今森さんの書かれたものに、時々「昆虫の表情」という言葉が出てきます。昆虫に表情がなくても、私たちはそこに表情を感じる。今森さんは昆虫を撮る時に何を見て、何を考えてシャッターを切るのでしょうか？何を伝えたいのか、という質問でもあると思います。

今森

すごく難しい質問で、写真によっても違いますが、一言で言うと「多様性と関わり」です。多様な生きもの同士がつながっていることを伝えたい。昆虫の顔の中にも、そういう想いが含まれていると思っていただけたら。

永田

まさにこのJT生命誌研究館が、30年間で培ってきた一つの大きな思想と重なります。人はヒトだけで生きているのではなく、他の多くの生物も含めて、自然のさまざまな関わりの中で生きているということですね。



写真展「今森光彦の時間 —昆虫4億年のの旅—から」

日時：2022年9月17日～2022年12月4日

場所：JT生命研究館



対談のダイジェストはこちら

※この記事は、2022年9月17日(土)に開催したJT生命誌研究館シンポジウム「生命誌から生命科学の明日を拓くIII『昆虫4億年』」の内容から抜粋し、季刊「生命誌」の記事としてまとめたものです。

SYMPOSIUM

質問タイム

3年ぶりに会場で語り合う

会場の参加者から4つの質問がありました。
どんな話題が展開したのか、ご覧ください。



Q1 素人の私が写真集を見て思う、多様性についての質問です。
例えば、ブラジルのアマゾンには、川の傍に同じような木がたくさん並んでいるように見えます。一方で、日本やインドネシアの里山には、水田があり、姿形が異なるさまざまな種類の木があるように見えます。
アマゾンの森と、日本やインドネシアの里山では、多様性はどのくらい違うのでしょうか？



今森

アマゾンの樹木はものすごく多様です。そして高さがあります。空間的な高低差が日本の森とは比較になりません。里山より、熱帯雨林は大きい歯車で回っているので、一つ歯車が壊れると再生が難しい。日本の雑木林のような人工森は、ごく小さな歯車で、代わりとなる歯車がいくつもあるのです。一つ壊れても再生しやすいです。自然の循環の規模が全く違う感じがします。

永田

私はキノコ刈りが好きでよく山に入ります。日本は同じ地域にいろいろなキノコが生えていますが、ヨーロッパでは一種類のキノコにしか出会えませんでした。日本は、本当に微に入り細に入り、非常に狭いところに非常に複雑なものが詰まっている感じがしますね。

Q2 切り絵作家の今森さんの姿をテレビで拝見しました。
里山を扱う今森さん、写真家の今森さんのルーツは昆虫少年の時代にあったと思いますが、切り絵はご自身の中でどのような位置づけですか？



今森

切り絵作家としてのモチベーションも、やはり多様性です。子どもの時からの感動を表現したいという思いです。切り絵は形が重視されるので、擬態昆虫などは、写真よりも切り絵の方がはっきりと分かります。私は小さい頃から、とにかくたくさん生きものを触っていました。触ることはデッサンなんです。描くだけではなく触ること。これが切り絵に生きていていると思います。

質問者

特に小さい子どもは、描くことより触ることでイメージをかき立てるようですが、それをどんどん広げたイメージですね。

永田

触ることは大事なコンセプトですね。先日、博物館で話をした時に「世界はさわらないとわからない」という講演をされた方がいました。触るという行為が、現代人の中で欠落しているのかもしれませんが。視覚文化になってしまって、目で見たら理解できると思っちゃうんですね。

Q3

「ダマシ」や「モドキ」が付いた昆虫の名前がありますが、これは1つの種類なのか、全体を指す名称なのでしょうか？



今森

そういう和名が付いた種だと思います。ダマシやモドキが付く名前はたくさんありますね。ある法則性のもと、命名した人のセンスで付けているんじゃないでしょうか。

永田

モドキなんて付いたらかわいそうですね(笑)。ナナフシモドキとかゴミムシダマシとか、好きなように名前を付けている(笑)。

今森

私はモドキが好きで、かっこいいなと思います(笑)。

Q4

小学校の子どもたちとフジバカマを植えて、アサギマダラの飛来を待っています。
生態についてみんなで探っているところです。
2000キロを飛ぶ中で、どのように世代交代をするのかなど教えていただきです。



今森

アサギマダラは移動するチョウなので、居る場所に幼虫の食草がない場合がほとんどです。私のアトリエの庭にも食草はありませんが、アサギマダラは台湾からよく飛んできてくれます。同じチョウに見えても、次の日には違うチョウが飛んできて来る。番号でも書かない限り、同じチョウが分かりません。今の時期、秋は絶えず北に移動して、また南の方に帰りますね。九州にはアサギマダラの食草がたくさんあり、幼虫が育つ有名な場所があります。生態については、本やインターネットにさまざまな情報があるので、調べてみてください。